

メガネとマスク

長谷川彩

登場人物

美緒^{みお}……十四歳、中学二年生。

父親が哲司の母親と再婚予定。現在、父親と二人暮らし。

母親は小学六年生の妹と二人暮らし。

哲司^{さとし}……十六歳、高校一年生。

母親が美緒の父親と再婚予定。現在、母親と二人暮らし。

父親は再婚し、相手との間に小学五年の娘がいる。

快晴。
風が強い。

百貨店の入口。

屋外と店内を隔てる、二重扉の内側の休憩スペース。
中央の円形の台座に、少年とも少女ともつかない銅像。

台座を囲む半円形の四人掛けの椅子。

ガラス越しに店内が見える。

店内アナウンスが流れているが、よく聞き取れない。

椅子に腰かけるマスクをつけた少女（美緒）。

背筋を伸ばしたり、マスクを気にしたりと手持ち無沙汰の様子。

そこへ、眼鏡をかけた少年（哲司）が、缶を二本手にしてやってくる。

哲司 （美緒に缶を一本差し出して）レモンティーって。

美緒、体を寄せ、哲司の座るスペースを空ける。

奥の席にも誰か座っており、スペースを空けてくれた様子。

哲司 （奥の席に、はっきりしない声で）あ、すみません。

哲司、空いたところに座る。

哲司 （缶を差し出し）レモンティー飲む？

美緒 あ。（受け取りながら）ありがとうございます。

哲司 あ、ごめん、どっちがいい？ お茶と。

美緒 あ、こっちで。

哲司 あ、そう。

美緒 すみません、ありがとうございます。

哲司 いえいえ。

二人、椅子の形のせいで別々の方向を向く。

美緒、缶を膝に置き、足元の鞆を漁る。

哲司、缶を開けて飲む。

哲司 本当はハーブティーがいいらしいんだけど。

美緒 (財布を取り出しながら) 何が？
哲司 花粉症。
美緒 (小銭を数枚出す) 効くんですか？
哲司 らしい。試してないけど。
美緒 (小銭を差し出し) 哲司君。
哲司 (美緒を見て) ん？ あ、いい、いい。
美緒 いえ。
哲司 いいよ、もらって。
美緒 いえ。
哲司 いや。
美緒 いや。
哲司 いや、もらってよ。
美緒 いや、でも、困るんで。
哲司 (笑って) 困らないですよ。
美緒 いえ、でも、ちよつと……。
哲司 ああ……。困ったな。
美緒 じゃあ、(哲司の持つ缶を指し) それ、私が買ったってことで、お互いに。
哲司 ああ。いや、でも、いいじゃない、ジュース代くらい。
美緒 いえ、でも。
哲司 うん。
美緒 ……。 (手を引っこめる)
哲司 まあ、いいじゃない。もらって。
美緒 あ、はい。ありがとうございます。
哲司 ごめんね。
美緒 いえ、すみません。
哲司 いや、まあ、いいじゃない。
美緒 ……。

美緒、財布に小銭を戻し、財布を鞆にしまう。
缶は膝の上に置いたまま飲まない。

哲司 気分どう？
美緒 あ、もう。
哲司 よくなった？
美緒 いいです、全然。
哲司 ああ、そう。よかった。

美緒 すみません、付き合わせて。

哲司 いや、全然。元々こっちが付き合ってたんだから。

美緒 いえ、それは全然。私ひとりで大丈夫なんで、哲司君、お母さん達と一緒に見てきたら？

哲司 (笑って) いや、あれに付き合うのは、俺もちよつと。

美緒 (つられて笑い) ああ。

哲司 人もすごいし。

美緒 日曜日ですもんね。

哲司 うん。しょうがないね。

美緒 はい。

哲司 人ごみ苦手？

美緒 ちよつと。

哲司 得意な人いないか。

美緒 (少し笑う)

哲司 (つられて笑う)

間。

屋外の雑踏と、よく聞こえない店内アナウンス。

美緒 花粉症なんですか？

哲司 え？ あ、俺は違う。

美緒 あ、え、ああ。

哲司 なんで？

美緒 詳しいから、お茶とか。

哲司 ああ、お茶は、前テレビで。

美緒 ああ。

哲司 なんか、甜茶っていうのがいんだって。

美緒 甜茶。

哲司 よくわかんないけど、なんか、中国のお茶。

美緒 へえ。

哲司 効くみたいだから、美緒ちゃん試してみたら？

美緒 あ、私、予防です。

哲司 え？

美緒 (マスクを外しながら) あの、予防で、花粉症の。

哲司 ああ、予防。

美緒 はい。

哲司 予防できるの？
美緒 はい。
哲司 へえ。マスクで？
美緒 はい。あの、花粉って、体に溜まっていくんですって。
哲司 へえ。
美緒 で、体に溜めれる限界があつて、あふれると、症状が出るんですって。目が
かゆくなったり、鼻水が出たり。
哲司 そうなんだ。
美緒 だから、まず体に入れないようにするといいつて。
哲司 なるほどね。
美緒 はい。
哲司 へえ、いいこと聞いた。
美緒 哲司君も、マスクした方がいいですよ。
哲司 うん、する。
美緒 します？（鞆を漁る）
哲司 あ、あるの？
美緒 （ポーチを取り出し）何枚か、予備で。
哲司 ああ。
美緒 （マスクを一枚取り出し、哲司に差し出し）どうぞ。
哲司 （受け取り）ごめん、ありがとう。
美緒 今大丈夫なら、早めに予防した方がいいですよ。
哲司 （マスクをしながら）そっか。そうだよね。
美緒 （マスクをつけ直し）私、もう出てるんで。
哲司 そうなの？
美緒 ちよつと。目とか鼻とかかゆくなります。
哲司 （マスクを直しながら）へえ、大変じゃん。
美緒 もう、なっちゃうと大変なんで。うちの母も花粉症なんですけど。
哲司 あ、そうなんだ。
美緒 母はもう、ひどいんで。
哲司 そんなに？
美緒 今の時期はもう、顔見れないから。
哲司 え、ああ、何、顔がぐずぐずになっちゃってってこと？
美緒 あ、いえ、マスクと、眼鏡もしてるんで。
哲司 （マスクを直しながら）あ、そういうことか。
美緒 （笑って）そんな大変なことには。
哲司 （笑って）ごめんね、お母さんに。

美緒 いえいえ。

哲司 ああ、そう。大変なんだ。

美緒 家の中でもずっとつけてますから。

哲司 本当。大変だ。

美緒 大変そう。

哲司 お母さん効くんじやない？ お茶。

美緒 ああ、効くかも。何でしたっけ。

哲司 甜茶。あと、ハーブティー。

美緒 ハーブティーって、ジャスミンティーみたいな。

哲司 (マスクを直しながら) あ、うん。でも、効くのと効かないのあるから、ジャスミンティーだと、ちよっとわかんない。

美緒 ああ。

哲司 ごめん、調べておくね。

美緒 あ、いえ、自分で。

哲司 ああ、そう？

美緒 調べてみます。

哲司 うん。ごめんね、よく知らないのに。

美緒 あ、いえ、私お茶のこと知らなかったんで。

哲司 あ、ならよかった。

美緒 はい。ありがとうございます。

哲司 いえいえ。

短い間。

哲司、マスクを直す。

哲司 (眼鏡を外し) 曇るな。

美緒 あ。

哲司 (マスクを外し、眼鏡をかけ直す) 何だろう、つけ方悪いのかな。

美緒 でも、これ安いので、あんまりよくないかも。

哲司 ああ、いや。(眼鏡を曇らせ、笑って) 見えなくなっちゃう。

美緒 すみません。

哲司 あ、いや、俺が下手だから。

美緒 あ、でも私も下手で曇るから、マスクする時は眼鏡しないです。

哲司 そっか。(マスクをポケットにしまい) 美緒ちゃん目悪いの？

美緒 少し。0・7とか8とか、それくらい。

哲司 ああ。いつもは眼鏡してない？

美緒 授業の時とか、映画見る時とかだけ。
哲司 普段見づらくない？
美緒 ちよつとぼやけたりはありますけど。
哲司 ああ。
美緒 悪いって言いますけどね、かけたとかかけなかったり。
哲司 言うね、かけるならかけた方が視力落ちないとか。
美緒 どうなんですかね、実際。
哲司 あんまり関係ないと思うけど。どうせ年取ったら落ちるし。
美緒 そうなんですか？
哲司 うちは。家系で。親どつちも悪いから。
美緒 へえ。
哲司 美緒ちゃんは、お父さんそんなに悪くなさそうだけど。
美緒 父は、そんなに。母が。
哲司 けっこう悪い？
美緒 悪いです。私より悪いです。
哲司 そうなんだ。会う？
美緒 え？
哲司 あ、ごめん、急に。
美緒 ああ、いえ。母、会いますよ。
哲司 ああ、そう。どのくらいのペースでとか、聞いていい？
美緒 会いたい時に。都合が合えば。
哲司 ああ。いいね。
美緒 まあ。
哲司 そつか。
美緒 あれですか、哲司君はあんまり会わない？
哲司 時々。うちもまあ、都合がつけば。
美緒 ああ。お母さんは？
哲司 うん、黙認。言っていないけど、たぶん知ってる。
美緒 ああ。
哲司 気つかう？
美緒 まあ。
哲司 そうだよね。
美緒 まあ、別にそれは。
哲司 ああ。
美緒 別に。
哲司 うん。

間。
風が強く吹く。

美緒 (同時に) 哲司君。ああ。

哲司 (同時に) 今日。ああ。

美緒 ごめんなさい。

哲司 いや、ごめん、何だった？

美緒 いえ、先。

哲司 いいよ、何？

美緒 いえ、全然。

哲司 いや、俺のはもう全然、今日風強いねってだけで。

美緒 ああ、そうですね。強いですね。

哲司 太陽出てるからあったかいけど、風冷たいから。

美緒 そうですよ。

哲司 花粉多そうだよ。

美緒 今日多たってニュースで言っていました。

哲司 ああ、やっぱり。

美緒 天気良くて、風強い日は、やっぱり。

哲司 そうだよ。あれかな、春一番。

美緒 春一番って先月じゃなかったですっけ。

哲司 あれ、そうだった。

美緒 前、お家にお邪魔した日に、なんか。

哲司 ああ、風強かった。

美緒 うん。

哲司 美緒ちゃんマスクしてたよね。

美緒 ああ、たぶん。

哲司 なんか、会う日いつも風強いね。

美緒 (笑って) そうですね。

二人、笑う。

短い間。

美緒、マスクを外し、鞆にしまう。

哲司 (気づいて) あれ、外すの？

美緒 いえ、自分だけつけてるのも、なんか。

哲司 いや、いいよ。なんで？
美緒 まあ、予防ですし。
哲司 いや、予防なら余計した方がいいよ。風強いし。
美緒 いえ、まあ、いいです。息しやすいし。
哲司 ああ、そう？
美緒 はい。
哲司 うん。まあ、いいなら全然。
美緒 はい。
哲司 ごめんね。
美緒 あ、いえ。

短い間。

美緒 哲司君は、あれですか？
哲司 はい。
美緒 目、けっこう悪いですか？
哲司 悪い。0・1ない。
美緒 あ、え、そんなに。
哲司 眼鏡ないと何にも見えない。
美緒 へえ。いつからですか？
哲司 眼鏡？
美緒 悪くなったの。
哲司 ああ、中二かな。二年前。
美緒 へえ。
哲司 うん。もう急にガクツと。
美緒 急にですか？
哲司 ちよっと見づらくなって思ってたけど、視力検査引っかからなかったから。
でも、二年の時の視力検査で、測ったらガクツと。
美緒 そんなに？
哲司 落ちてた。一気に。自覚なかったけど。
美緒 急にくるんですかね。
哲司 ああ、どうだろう。個人差だと思うけど、俺は、気づいたら。
美緒 近視？
哲司 うん。俺ね、右はまだいいんだけど、左けっこう乱視入ってる。
美緒 そういうのあるんですか？ 片方だけって。
哲司 ある。だから（眼鏡を外し、右目を手で隠し）こうした時と、（左目を手で

（隠し） こうした時で、全然違う。

美緒 へえ。

哲司 （眼鏡をかけ）美緒ちゃんもたぶん違うよ。

美緒 えー。

美緒、片目ずつ交互に隠す。

哲司 眼鏡作る時言われなかった？ 右いくつ左いくつとか。

美緒 ああ、言われたかも。本当だ、全然違う。

哲司 どっち見えづらい？

美緒 左が。あ、左を隠してる方が。

哲司 じゃあ右の方が悪いんだ。

美緒 意識したことなかった。

哲司 片方ずつで見ることないもんね。

美緒 （片目ずつ隠し、遠くを見て）けっこう違います。

哲司 （下手の方を指さし）あれ読める？

美緒 どれですか？

哲司 あの、チラシ。ガラスに貼られてるやつ。

美緒 （下手の方を指さし）あれですか？

哲司 うん。一番太字の。

美緒 （目を細めてじっと見る）……え、あれですよね、「北海道物産展」。

哲司 じゃあ、その太字のすぐ上の字。

美緒 （目を細めたまま）上？

哲司 ピンクの。

美緒 （目を細めたまま）……ピンクの字？

哲司 見えない？

美緒 見えないです。

哲司 え、落ちてない？

美緒 え。

哲司 俺、（眼鏡を示して）これかけて0・7いかないくらいだから。

美緒 え、読めないです。

哲司 落ちてるんじゃない？

美緒 えー。

美緒、鞆から眼鏡ケースを取り出す。

哲司 (笑って) あ、ずるしようとしてる。
美緒 (笑って、眼鏡をかけ) あ、「春到来」。
哲司 かけたらずるいじゃん。
美緒 見えないんですもん。
哲司 俺も今でギリギリだもん。
美緒 えー、落ちたかな。
哲司 眼鏡作ったのいつ？
美緒 けっこう前です。もう、小学生の頃なんで、
年前。(数えて) 二、一、六、五。四
哲司 あ、けっこう前だね。
美緒 けっこう前です。
哲司 視力検査って毎年あるつけ。
美緒 毎年やってます。
哲司 変わってないの？
美緒 眼鏡の人はかけたままやるんで。
哲司 かければ平気？
美緒 うーん、一応。
哲司 そっか。
美緒 あ、でも、けっこう適当に言っちゃうから。
哲司 何が？
美緒 あの、視力検査、けっこうぼやけてても適当に言うときありません？
哲司 ああ、何となくこっちつぽいかなって。
美緒 そう、けっこう当たるんですよ。
哲司 ああ。
美緒 それで変わってないのかも。
哲司 それはあるかもしれない。
美緒 落ちてるのかなあ。
哲司 測ってもらったら？ 眼鏡屋さん行って。
美緒 その方がいいですかね。
哲司 行く？ あると思うけど。
美緒 あります？
哲司 あると思うよ。
哲司、去る。

美緒、眼鏡ケースを鞆にしまう。
眼鏡をずらしたりかけたりして、缶のラベルを見る。

しばらくして、缶を靴にしまう。

下手側を見て、眼鏡をずらして見たり、片目を手で隠して見たり。

哲司、戻る。

哲司 ありそうだけど。

美緒 ありますか。

哲司 行く？

美緒 うーん。

哲司 母さん達まだかかるだろうし、よければ付き合おうけど。

美緒 あ、でも、いいです。また酔うかもしれないし。

哲司 ああ、そっか。そうだよね。

美緒 すみません。

哲司 いや、それは全然。

間。

美緒、下手側を見て、眼鏡をずらしたりかけたりする。

哲司、美緒の様子に気づく。

美緒 見えないです。

哲司 まあでも、生活に支障なければいいんじゃない？

美緒 行った方がいいかなあ。

哲司 普段行くお店とかある？

美緒 ああ、（眼鏡を示して）これ買ったのは、いつも母が行くところです。

哲司 眼鏡それひとつ？

美緒 これだけです。

哲司 そっか。

美緒 高いですし。

哲司 そうだよね。

美緒 哲司君は？

哲司 これだけ。

美緒 哲司君の、すごく高そう。

哲司 いや、これ二九八〇円だよ。

美緒 え！

哲司 フレームだけね。

美緒 あ、フレームだけ。

哲司 俺のレンズ代入れたらけっこうかかるから、フレームいいのだからかなりかか

っちゃうから。

美緒 そうですよね。

哲司 美緒ちゃんのいいね、色きれい。

美緒 あ、ありがとうございます。

哲司 いい色。美緒ちゃんに合ってる。

美緒 母が選んでくれたやつなんです。

哲司 あ、そうなんだ。

美緒 もう、すごく時間かかっちゃって。三時間くらい。

哲司 そんなに？

美緒 お店にあるやつ全部かけたかもしれない。

哲司 (笑って) へえ。

美緒 母が、これが一番いいって言うんで、私もこれがいいかなって。

哲司 いいよ、似合ってるもん。

美緒 そうですか？

哲司 うん、いいよ、似合う。お母さんセンスいいね。

美緒 (笑って) あ、ありがとうございます。

哲司 いえいえ。

短い間。

哲司 前かけてたっけ？

美緒 前？

哲司 家来た時。

美緒 たぶんかけてないです。

哲司 そっか。あれ、会うの何回目だっけ。

美緒 今日で三回目。

哲司 え、そうだっけ。

美緒 二月に顔合わせしたのと、お家にお邪魔したのと。

哲司 それから会ってなかったっけ。

美緒 哲司君とは。

哲司 あれ、そうだっけ。

美緒 (笑って) はい。

哲司 なんか、もうだいたいぶ会ってる気する。

美緒 そうですか？

哲司 あ、別に変な意味じゃないんだけど。

美緒 ああ、はい。

哲司 (笑って) 変な意味って、そういうのじゃないんだけど。
美緒 (笑って) いえ、はい。
哲司 なんだ、三回目か。
美緒 お母さんとは、もうだいぶ会ってますけど。
哲司 そうだよね、母さんとは。
美緒 もう、何回だろう。
哲司 そっか、母さんから美緒ちゃんの話聞くからかも。どこ行ったとか何食べたとか。
美緒 あ、へえ。
哲司 ごめんね、連れ回して。今日もだけど。
美緒 ああ、いえ、全然。
哲司 いや、なんかね、テンション上がっちゃってるんだよ。何、ウェディングハイツって言うの？
美緒 わかります。
哲司 あ、やっぱりわかる？
美緒 あ、いえ、父もそうなんです。
哲司 ああ、そうなんだ。
美緒 ちよつと。
哲司 そっか。(笑って) 少しね。
美緒 え？
哲司 (笑って) いや、言っちゃうとあれなんだけどさ。
美緒 はい。
哲司 (笑って) うざいよね。
美緒 (笑う)
哲司 わかる？
美緒 わかります。
哲司 (笑って) なんかね。
美緒 (笑って) なんかね。
哲司 うん。まあ、本人達はね。
美緒 自覚ないですよね。
哲司 ないんだよ。そこがあれなんだよね。
美緒 (笑って) はい。
哲司 毎週だもんな。俺バイトと部活で土日埋まるから、あんまり付き合っていないけど。
美緒 あ、バスケット部。
哲司 あれ、話したっけ？

美緒 お母さんから。

哲司 ああ。美緒ちゃんは、部活とか塾は？

美緒 一応、どっちも。

哲司 土日ない？

美緒 ないです。放課後だけ。

哲司 そっか。

美緒 だから、土日は暇なんで。

哲司 いや、言うんだけどね。あんまり付き合わせたら、美緒ちゃんも色々あれだ
ろうからって。

美緒 いえ、私は全然。

哲司 聞かなくて。ハイだから、今。

美緒 (笑って) ああ。

哲司 ごめんね。迷惑だったら言っていから。本人言わないと気づかないから。

美緒 いえ、楽しんでます。

哲司 本当？

美緒 私一人だと、あんまり遊びに行かないですし。

哲司 友達とかは？

美緒 あんまり。

哲司 ああ。

美緒 だから、暇なんで、全然。

哲司 ならいいけど。

美緒 はい。

哲司 そっか。

美緒 はい。

哲司 ごめんね。

美緒 いえ。

間。

哲司、缶の中身を飲み干す。

哲司 捨ててくるね。

美緒 あ、はい。

哲司、去る。

美緒、上手側を眺め、しばらくして見飽きたのかうつむく。
間。

美緒、ふと顔を上げる。

誰かが哲司の座っていた椅子に座ろうとした様子。

美緒 (はつきりしない声で) あ……すみません。

美緒、少し体をずらし、席を確保しようとする。

席の真ん中に座るのに気が引けるのか、居心地悪そうにする。

自分の鞆を哲司の座っていたところに置く。

外を眺める。

雑踏が響く。

間。

哲司、戻ってくる。

美緒、椅子に置いた鞆をどけようとする。

哲司、椅子に戻らず、下手側に進んで行って、じっと何かを見る。

チラシを読んでいる様子。

美緒、鞆から手を離す。

しばらくして、哲司、ポケットから携帯電話を取り出し、かけながら戻ってくる。

美緒、鞆をどけて、足元に置く。

哲司 (気づいて) あ、ごめん。

美緒 いえ。

哲司 今日最終日だって、北海道展。

美緒 ああ、そうみたいです。

哲司 美緒ちゃん、何か欲しいのあったら頼むけど。

美緒 あ、いえ。

哲司 ない？

美緒 大丈夫です。

哲司 そう。

美緒 すみません。

哲司 ああ、いや、それは全然。(電話に向かって) もしもし。……(声が大きくなり) え? ……はい。まだかかりそう? ……ああ、そう。……いや、ないです。……(また幾分か声が大きくなり) ないです。うん。……いいよ、適当にや
ってるから。うん。……(笑って) はいはい。じゃあ。(電話を切り、ポケット
にしまう) まだ見てるって。

美緒 そうですか。

哲司 (座りながら) 疲れた？

美緒 あ、いえ、全然。

哲司 ちゃんと美緒ちゃんをエスコートしなさいだって。

美緒 (笑う)

哲司 エスコートできてますか？

美緒 完璧です。

哲司 (笑って) じゃあよかったです。

間。

美緒、哲司、それぞれ違う方を向いている。

哲司、チラシに目を向ける。

哲司 北海道好き？

美緒 え？

哲司 北海道。

美緒 ああ、でも好きですよ。

哲司 行ったことある？

美緒 一回だけ。

哲司 あ、いいな。どうだった？

美緒 ああ、あんまり覚えてなくて。

哲司 あ、そうなんだ。何歳の時？

美緒 たぶん幼稚園の頃に。

哲司 ああ、そっか。家族で？

美緒 あー、たぶん。

哲司 (笑って) そこもたぶんなんだ。

美緒 うーん、母と妹がいたのは、覚えてるんですけど、父が、いたっけな。

哲司 (笑って) お父さんかわいそう。

美緒 いえ、もう、その時は別れてたかもしれないんで。

哲司 ああ。

美緒 微妙な時期だったんで。

哲司 そっか。

美緒 (笑って) もう記憶が、牧場でソフトクリーム食べたくらいしか。

哲司 (笑って) へえ。

美緒 (笑って) 妹がずっと泣いてたんですよ。母ずっと妹抱っこしてて、私ひとりですつと放つとかれたから。

哲司 (笑って) ああ。

美緒 (笑って) ひとりですフトクリーム食べてました。記憶それだけ。
哲司 (笑って) あんまりいい思い出じゃないね。
美緒 (笑って) もう全然。
哲司 そっか。じゃああんまり北海道行きたくない？
美緒 あ、いえ、別に行くのは。
哲司 いい？
美緒 それは、はい。
哲司 いや、母さん、新婚旅行北海道がいいって言うから。
美緒 ああ。
哲司 聞いた？
美緒 今日は下見だつて。
哲司 うん。(笑って) 食べ物だけね。
美緒 (笑う)
哲司 まあ、別にいいんだけど。
美緒 北海道なんですかね？
哲司 どうだろう。母さんはもうその気みたいだけど。
美緒 父も、なんか割とそんな感じでした。
哲司 北海道ね。
美緒 私達、どうするんですかね？
哲司 何が？
美緒 行くんですかね？
哲司 え、行かないの？
美緒 行くんですか？
哲司 いや、だって、母さんその気だよ。美緒ちゃんと夜恋バナするって言ったもん。
美緒 (笑って) 恋バナ。
哲司 (笑って) うん。何、普通どうなの？ ついてかないもん？
美緒 いや、だって、新婚旅行ですよ。
哲司 ああ、そっか。
美緒 ついてっても。
哲司 そうだよね。
美緒 子供小さいとかならわかるけど。
哲司 そうだよね。(笑って) 小さいのかな、俺達。
美緒 (笑って) 小さいのかな。
哲司 美緒ちゃんは少し小さいよね。
美緒 (笑って) えー、クラスの中では普通ですよ。

哲司 (笑って) そっか。ごめん、ごめん。
美緒 (笑って) ひどい。
哲司 (笑って) ごめんね。

短い間。

哲司 結局、俺達行くってことなのかな。
美緒 お邪魔じゃないですかね。
哲司 まあ、わかんないけど。
美緒 うん。
哲司 じゃあ残る？
美緒 残る方がいいですかね。
哲司 そっか。

短い間。

哲司 あ、駄目だ。
美緒 え？
哲司 あ、いやいや。
美緒 何ですか？
哲司 いや、うん、あの、うん。
美緒 え？
哲司 いや、あの、まあ……何だろう。
美緒 はい。
哲司 (笑って) あの、ごめんね、変なこと言うけど、あの、俺達だけ残るのは、ちよつとあれだから。
美緒 え？
哲司 いや、だって……あ、うん。ごめん、やっぱりいや。
美緒 え？
哲司 いい、ごめん。
美緒 (曖昧に) はい。

短い間。

美緒 あ。
哲司 ん？

美緒 ああ、いえ。
哲司 うん。

短い間。

美緒 気にしますか？

哲司 何が？

美緒 あの、さっきの、私達だけ残ると、あれだって言う。

哲司 (察して) ああ、ああ。

美緒 やっぱり気になりますかね。

哲司 いや、もう、ごめん、変なこと言って。

美緒 ああ、いえ、それは全然。

哲司 いや、もういいから。

美緒 いや、でも、まあ。

哲司 うん。

美緒 その、まあ。

哲司 いや、だから、俺達もついてればいいわけですよ。

美緒 うーん、まあ、そっか。そっか。

哲司 うん、それでいいんだよ。

美緒 そっか。

哲司 うん。

短い間。

美緒 あの、ごめんなさい。

哲司 はい。

美緒 なんか、やっぱりちよっと、あれかなって。

哲司 あれって？

美緒 いや、いいんですかね、その、ついてくっついていうので。

哲司 うん、いいんですよ、それで。

美緒 いや、それで、もう何にも問題ないんですかね。

哲司 ないよ、ないですよ。なんで？

美緒 いや、なんか、そういうことじゃない気がするんですよ。

哲司 え、何が？

美緒 いや、だって、新婚旅行っていうと、なんか。

哲司 うん。

美緒 まあ、あの、普通の旅行とは違うじゃないですか。
哲司 え？
美緒 あの、だって、うん……うん。
哲司 (察して) あ。いや……うん。
美緒 でも、まあ、新婚旅行って。
哲司 うん。
美緒 まあ、実際は。
哲司 いや、もう、ごめん。俺が変なこと言ったから。
美緒 いえ、でも、まあ。
哲司 うん。
美緒 実際は。
哲司 いや、うん。
美緒 あの、まあ、あんまり考えてなかったんで。
哲司 いや、ごめん、やっぱり違うわ。
美緒 違うって？
哲司 考えなくていいんだよ。俺達関係ないし。
美緒 いや、関係はあるでしょ。
哲司 あ、うん、関係はあるけど。あるけど、いや、でも。
美緒 (遮って) いえ、あの、本当は、考えたこともあったんで。
哲司 ああ。
美緒 でも、本当は、わざと気にしないようにしてたって言うか。
哲司 うん、だから。
美緒 (遮って) だから、あの、なんて言えばいいんだろう。
哲司 (遮って) いや、だから、考えなくていいんだよ。考えちゃ駄目なんだよ。
美緒 あ、やっぱりそうなんですかね。
哲司 いや、ごめん、本当に。俺が変なこと言った。ごめん。忘れて。
美緒 うん、まあ。
哲司 いいんだよ、もう、ね。
美緒 ああ、はい。
哲司 ごめんね、本当に。
美緒 いえ、私もあれだったんで。
哲司 いや、本当に、もう。
美緒 ああ。
哲司 うん。

二人、椅子に座り直す。

それぞれ別の方を向く。
間。

若者達の声。
百貨店の前を通り過ぎていった様子。
二人、目で追う。

美緒 哲司君は。

哲司 はい。

美緒 今日は、部活お休みですか？

哲司 うん、休み。春休みはなし。

美緒 あ、そうなんだ。バイトは？

哲司 今日は休み。

美緒 ああ。

短い間。

哲司 美緒ちゃん文化部？

美緒 文化部です。

哲司 そうだよね。

美緒 え、なんですか？

哲司 運動部っぽくないなーと思って。

美緒 (笑って) え、どういうことですか。

哲司 (笑って) いや、別に大した意味はないんだけど。

美緒 運動できなさそうですか？

哲司 いや、苦手って言うか、そんな好きじゃなさそう。

美緒 バスケもけっこう好きですよ。

哲司 あ、やるの？

美緒 あ、いえ、体育で。

哲司 ああ、そっか。体育ね。

美緒 楽しいですよ。

哲司 うん。美緒ちゃんは何部なの？

美緒 私は、福祉活動部っていうのに。

哲司 え、福祉？

美緒 はい。

哲司 福祉って、介護とかの福祉？

美緒 うーん、介護って言うか、学校の近くに老人ホームがあつて、そこにお邪魔

して、遊んだりお話ししたりするっていう。

哲司 へえ、すごいね。

美緒 いえ、全然すごくは。

哲司 喜んでくれるんだ、おじいちゃんおばあちゃん。

美緒 そうですね、喜んでくれてますね。

哲司 そうだよな、孫みたいなんでもんね。

美緒 まあ。

哲司 へえ、福祉。

美緒 はい。

哲司 そうなんだ。

美緒 はい。

哲司 へえ。楽しい？

美緒 はい。けっこう楽しいです。

哲司 そうなんだ。へえ。

美緒 私、部長になったんですよ。

哲司 あ、そうなの？

美緒 つて言うか、三年が私と友達だけなんで。

哲司 ああ、そっか。

美緒 後輩も今ひとりだけなんで、四月に一年入ってくれないと、けっこう困るんですけど。

哲司 あんまり人気ないんだ。

美緒 (笑って) ないです、全然。

哲司 そっか。なんか、ちよつと敷居高そうだよな。真面目そうって言うか。

美緒 そんなに堅苦しくはないですけど、まあでも、そうですね。

哲司 うん。でも楽しいんですよ。

美緒 はい。それは、はい。

哲司 へえ。すごいね。

美緒 いやいや、全然すごくないですよ。

哲司 いや、だってもう、社会貢献じゃん。

美緒 (笑って) そうですか？

哲司 そうだよ。バスケやるよりずっと役に立ってるし。

美緒 (笑って) いや、まあ、それとこれとは違うと思いますけど。

哲司 (笑って) うん、まあ。でもすごいよ、本当に。偉い。

美緒 (笑う)

哲司 福祉活動部。

美緒 実際は、行って話したりするだけなんで。

哲司 ああ。

美緒 話したり、一緒に歌うたったりするだけなんで、全然。

哲司 へえ。

美緒 今度、新入生入ったら人形劇やる予定なんですよ。

哲司 人形劇。へえ、すごい。

美緒 今人形作ってるんですけど。

哲司 え、美緒ちゃんが？

美緒 はい。

哲司 え、すご。

美緒 いえ全然。

哲司 人形劇って、あれだよな。なんかぬいぐるみみたいなの。

美緒 はい。あ、持ってる。(鞆を漁る)

哲司 ある？

美緒 作りかけなんですけど。

哲司 あ、見たい。

美緒 全然できてないんで、あれなんですけど。

哲司 うん。

美緒、鞆からポーチを取り出し、中から作りかけの人形を二つ取り出す。
肌色のフェルト地でできた球体に布をつけた、テルテル坊主のようなもの。

美緒 (哲司に一つ渡し) こんな感じの。

哲司 (受け取り) へえ。(笑って) これ顔ないけど。

美緒 だから、途中なんですってば。

哲司 (右手にはめて) へえ。

美緒 これに、髪の毛ついたり、服着せたりするんですよ。

哲司 そっか。ああ、でもよくできてる。器用だね、美緒ちゃん。

美緒 いえ、よく見るとけっこう雑ですよ。

哲司 本当？ (人形を外し、中をのぞき) あ、本当だ。

美緒 (笑って) 見なくていいです、見なくて。

哲司 (笑う。人形を右手にはめて) 「こんにちは」

美緒 (笑う)

哲司 (笑って) ほら。「こんにちは」

美緒 (人形を右手にはめて) 「こんにちは」

哲司 「いい天気ですね」

美緒 「そうですね」

哲司 「花粉がよく飛びますね」
美緒 (笑う)
哲司 (笑う。人形を外し、美緒に返し) ありがとう。
美緒 いえ。
哲司 福祉活動部か。すごいね、本当に。
美緒 「いえ、もう本当に、全然すごくないんで。
哲司 いやいや。そっち進むの？
美緒 え？
哲司 福祉系。
美緒 あー、いや。
哲司 やらないの？
美緒 それは、あんまり。
哲司 そうなんだ。せつかくなら資格取れば、将来安泰だし。
美緒 いや、いや。だってもう。
哲司 楽しいんですよ？
美緒 いや、まあ、楽しいですけど。
哲司 (笑って) え、楽しいんだよね？
美緒 いや、うん。はい。
哲司 (笑って) あ、美緒ちゃん。
美緒 (笑って) いえ、楽しいですよ。
哲司 ちょっと一回腹割って話そうよ。
美緒 いや、楽しいです、楽しいです。
哲司 いや、何か隠してるでしょ。
美緒 (笑って) 楽しいですって。
哲司 いや、駄目だよ。俺わかっちゃったんだから。
美緒 (笑って) いや、本当に楽しいです。
哲司 いや、違うでしょ。言いたいことあるでしょ。
美緒 そんなことないですって。
哲司 いや、そうだよ。美緒ちゃんも言わない癖ついてるよ。わかるんだから、俺
　　そういうの。
美緒 (笑って) 何にもないですよ。
哲司 あ、じゃあ、(人形を示して) これで言おう。
美緒 (人形を右手にはめて) これで？
哲司 (人形を右手にはめて) ほら、言うのこいつだから、美緒ちゃんじゃないか
　　ら。
美緒 ええー。

哲司 劇の練習だと思えばいいから。

美緒 そんなこと言われても。

哲司 (人形を動かして) 「美緒ちゃん、部活楽しいですか？」

美緒 (笑って、人形を動かして) 「楽しいです」

哲司 美緒ちゃん。

美緒 (笑って) だって。

哲司 駄目だって。「美緒ちゃん、部活は楽しいですか？」

美緒 うーん……「よくわかんないです」

哲司 「わかんないの？」

美緒 「うん」

哲司 「楽しいんじゃないの？」

美緒 「楽しくないわけじゃないけど」

哲司 「だけど？」

美緒 うーん……。

哲司 「楽しくないわけじゃないけど？」

美緒 「だって、老人ホームよりバスケの方が、絶対楽しいでしょ？」

哲司 (笑う)

美緒 (笑う)

哲司 (笑って) 言っちゃった。

美緒 (笑って) 言っちゃった。

哲司 え、なんで入ったの？

美緒 いや、友達に誘われて入ったんですけど、みんな塾とかあってやめちゃって、二人になっちゃったから。

哲司 やめれないんだ。

美緒 最後にやめちゃうと、悪者みたいじゃないですか。

哲司 (笑って) あ、本音出た。

美緒 (笑って) 言うつもりなかったのに。

哲司 やめちゃえば？

美緒 うーん……。

哲司 友達に悪い？

美緒 って言うか……。 (笑う)

哲司 え、何？

美緒 (人形を動かして) 「内申点上がるんですよ」

哲司 (笑う)

美緒 (笑う)

哲司 ウケいいの？

美緒 福祉活動部って言うのと、部長って言うので。
哲司 いいんだ。
美緒 いいです。
哲司 (笑って) いいね、俺そういうの好き。
美緒 (笑って) もう哲司君嫌いになった。
哲司 (笑う)
美緒 あーあ、私最悪だ。
哲司 いいよ、いいよ。たまには吐き出さないと。俺達溜め込み癖ついてるから。
美緒 そうですかね。
哲司 うん、いい、いい。
美緒 じゃあ、次哲司君。
哲司 え、俺？
美緒 順番。
哲司 いや、俺何もないよ。
美緒 あるでしょ、わかりますよ。
哲司 ないって。
美緒 ありますって、絶対。溜め込んでますよ。
哲司 俺は好きでバスケ部やってるから。
美緒 いや、そっちじゃなくて、日常生活で。
哲司 え、何言えばいいのよ。
美緒 とりあえず私の父に何か言いたいことでも。
哲司 何それ！ 美緒ちゃんよりハードル高いじゃん。
美緒 私だって言わされたんですからね。
哲司 (笑って) あれ、根に持ってる？
美緒 私だけ言うのは不公平ですよ。
哲司 でも、部活とお父さんのことじゃ、全然違うじゃん。
美緒 はい、言いますよ。吐き出しましょう。
哲司 (笑って) ええー。
美緒 ほら、言うのこいつですから。言わせちゃいましょう。
哲司 実際に言うのは俺なんだけどね。
美緒 私も言ったんですよ。
哲司 (笑って) いや、うん。はい。でも言うことないんだよな。
美緒 考えてください。
哲司 考えろって。
美緒 (人形を動かして) 「父について、どう思いますか？」
哲司 (笑って) 父についてとか。

美緒 (笑って) ごめんなさい。じゃあ、「美緒のお父さんのことどう思いますか？」

哲司 「いい人だと思います」

美緒 哲司君。

哲司 (笑って) いや、言います、言います。

美緒 「どう思いますか？」

哲司 そうだなあ。「ちよっと怖そうかな」

美緒 そうですか？

哲司 ちよっとね。

美緒 優しい方だと思いますけど。

哲司 うん、実際はね。話すと全然。

美緒 見た目？

哲司 見た目。ちよっと厳しそう。

美緒 ああ。

哲司 ちよっとね。

美緒 へえ、そっか。「他には？」

哲司 他に……うーん。

美緒 何か。

哲司 俺、けっこう気に入ってもらってるからなあ。

美緒 ああ。

哲司 言いたいことないんだよな。

美緒 男の子欲しかったんですって、お父さん。

哲司 ああ、言ってた。

美緒 あ、本当ですか。

哲司 前に家来た時。ほら、俺お父さんとキャッチボールに行ったでしょ。

美緒 はい。

哲司 あの時に。あ。(笑って) あった、言いたいこと。

美緒 あ、何ですか？

哲司 「あのね、息子とキャッチボールするのが夢だったのはいいけど、僕野球そんなに好きなのじゃやないんですよ。二時間も付き合わせないでください」

美緒 (笑う)

哲司 「一緒に住んだら、夕飯前は毎日キャッチボールとか、勘弁してください」

美緒 (笑う)

哲司 「でも、お父さんの顔見てると、やりたくないって言えないんですよ」

美緒 (笑って) ごめんなさい。

哲司 「僕今気がついてますよ。気づいてください」

美緒 (笑う)
哲司 言っちゃった。
美緒 (笑って) 言っちゃった。
哲司 言わないでね。
美緒 どうしようかな。
哲司 やめてよ。内申のこと言っちゃうよ。
美緒 (笑って) やめてくださいよ。
哲司 あーあ、言っちゃった。
美緒 (笑う)
哲司 はい、じゃあ次美緒ちゃん。
美緒 え！ 私さつき終わったじゃないですか。
哲司 母さんのこと言っていないじゃないの。
美緒 いや、私の部活のこと言って、哲司君は父のこと言ったんだから、これと同じですよ。
哲司 いやいや、部活のことは軽いつて。俺お父さんの悪口言っちゃったんだから。
美緒 (笑って) 悪口じゃないでしょ。
哲司 (笑って) 悪口じゃないけど。じゃあ軽くいいから。ね。軽くどこが嫌いか。
美緒 (笑って) 嫌いじゃないですよ！
哲司 (笑って) いや、まあ嫌いつてほどじゃなくても、どこら辺が苦手かっていうのを、軽く。
美緒 ないですよ、いい人ですもん、お母さん。
哲司 はい、そういうのいいです。(人形を動かして) 「哲司の母親をどう思いますか？」
美緒 (笑って) ええー。
哲司 軽くね。「どう思いますか？」
美緒 「いい人だと思います」
哲司 「そういうのはもういいです」
美緒 (笑う)
哲司 (笑って) 「正直な感想をお願いします」
美緒 うーん……「ちよっと、会うペースが早いです。もうちよっと距離置きたいです」
哲司 ああ、やっぱり。
美緒 ちよっと。
哲司 気になってた。距離の詰め方強引だなって。
美緒 いや、まあ、全然いいんですけど、もうちよっとゆっくりでもいいかなって。

哲司 うん。「他には？」
美緒 うーん……「お父さんののろけ話聞かせないでください。ちょっと気持ち悪いです」
哲司 うわ、そんなことしてるの？
美緒 (笑って) してます。
哲司 気持ち悪。
美緒 ちよつと。
哲司 ごめん、言っとく。
美緒 え！ 言わないって言ったじゃないですか！
哲司 あ、そうだ、ごめん。言わない、言わない。
美緒 びっくりした。
哲司 (笑って) ごめん。「他にありますか？」
美緒 うーん……私もけっこう気に入ってもらえてるんで。
哲司 うん。家で美緒ちゃんかわいいしか言わないから、あの人。
美緒 (笑って) あ、ありがとうございます。
哲司 あの人も娘ほしかつたんだって。
美緒 ああ、はい。
哲司 聞いた？
美緒 聞きました。
哲司 俺生まれてちよつとがっかりしたんだって。
美緒 (笑う)
哲司 (笑って) 知るか。
美緒 (笑って) そうですよね。
哲司 (笑って) まあ、だから、うまく一致してるよね。あつちは息子ほしくて、こつちは娘ほしいって。
美緒 そうですね。
哲司 「他には？」
美緒 うーん……一個。
哲司 (笑って) のつてきた。
美緒 (笑って) のつてきたとかじゃないけど。
哲司 「何ですか？」
美緒 「あの、早く結婚したいとか、早く一緒に暮らしたいとか、あんまり言わないでほしいです。急かされてるみたいで、ちよつと嫌です」
哲司 そんなこと言うの？
美緒 時々。
哲司 ああ。

美緒 でも、あ。(人形を動かし)「でも、待ってもらってるんで、言えないです。

(笑って)「ちょっと気つかってます」

哲司 いや、それは言っていないよ。

美緒 (笑って)「無理言わないでください」

哲司 でも嫌なんでしょ？

美緒 嫌って言うか、ちょっと、どうしていいかわかんないんで。

哲司 だったら言っていないよ。たぶん本人わかってないから。

美緒 いや、でも、待ってもらってるんで。

哲司 でも、それはさ、向こうが勝手に決めただから。美緒ちゃんは卒業してか
らとか言っていないでしょ？

美緒 それは、言っていないですけど。

哲司 だったら、そういうことは言っちゃ駄目だよ。それはルール違反だよ。

美緒 いや、でも、二人ともこっちのこと考えて、日にち延ばしてくれてるんで。

哲司 いや、でもさ。(笑って)「ごめんね、俺さっきからでもばっか言ってるけど。

美緒 あ、いえ。

哲司 でもね、俺達のこと考えてるって言うけど、じゃあ俺が高校出るまで待つっ
ていう話にはならなかったわけですよ。

美緒 ああ、うん、もしかしたら、出たのかもしれないけど。

哲司 いや、うん、出たのかもしれないけど、それはまあいいかってことになっ

たわけだよ。美緒ちゃんの卒業は待てるけど、俺の卒業は待てなかったわけだ
よね。

美緒 でも、そうになったら、次は私が高校出るまで待つって話になるから。

哲司 うん、だから、だったら後四年待つべきなんじゃないの？ 美緒ちゃんが中

学出るのを待ったんだったら。

美緒 でも、四年も待ったら、もうお母さん、歳が。

哲司 (遮って)「いや、だから、そういうのってさ。(笑って)……ごめん、ちょ

っと、やめようか。

美緒 あ、はい。

哲司 ごめんね。ちょっと、話が変な方に行っちゃって。

美緒 いえ。

哲司 ごめんね。

二人、椅子に座り直す。

それぞれ違う方を向く。

賑わう声と雑踏。

店内アナウンスが遠くで聞こえる。

間。
哲司、手の中の人形を眺めている。
美緒、横目で哲司の様子をうかがって、自分も持っていた人形を見る。
右手に人形をはめ、動かす。
遠慮がちに、哲司の方へ人形を向ける。
哲司、それに気づく。

哲司 (笑って) 何？
美緒 かわいくないですか？
哲司 うん、かわいい。
美緒 我ながらよくできてると思うんですよ。
哲司 うん、よくできてるよ。
美緒 はい。(哲司に人形を渡す)
哲司 (受け取り、人形を左右の手にはめて、美緒に見せ) はい。
美緒 (笑って) かわいい、かわいい。
哲司 (笑って) 顔があれば、もっとかわいいけどね。
美緒 (笑って) 新学期までには作ります。
哲司 あと五日だ。がんばって。
美緒 がんばります。
哲司 なんで人形劇なの？
美緒 え？
哲司 いや、普通の劇とかじゃなくて、人形劇っていうのは。
美緒 ああ、いや、さすがに普通の劇は、恥ずかしくて。
哲司 ああ。
美緒 恥ずかしくないですか？ 学芸会とか。
哲司 わかる。俺も苦手。
美緒 人形劇なら、まだなんとかか。
哲司 じゃあ劇じゃない方がいいんじゃない？ 歌とかもつと別の出し物にすれば？
美緒 ああ、でも、手作り感ある方がいいよねって。
哲司 誰が？
美緒 友達。
哲司 やっぱり。
美緒 やっぱりって？
哲司 美緒ちゃんが手作りしようとか言わないだろうなあって思ってた。
美緒 (笑って) どういう意味ですか？

哲司 (笑って) 嫌々やってるから。
美緒 (笑って) 嫌々じゃないですよ、ちゃんとやっていますよ。
哲司 内申のために。
美緒 (笑って) 違いますってば。
哲司 (笑って) なるほどね、それで人形劇ね。
美緒 部費少ないし、手作りすればそんなにお金かからないんで。
哲司 そっか。どんなのやるの？
美緒 どんなの？
哲司 お話。どんな話するの？
美緒 まだ決まっています。
哲司 あ、まだなんだ。
美緒 新入生が入ってから決めようかって。
哲司 ああ、その方がいいかもね。
美緒 入部してくれるかわかんないし。
哲司 大丈夫、大丈夫。いる、いる。
美緒 うーん、いない気がするんですけどよね。
哲司 いるって。内申欲しい子が。
美緒 (笑って) そんな打算的な。
哲司 打算駄目？ 俺モチたくてバスケ部入ったんだけど。
美緒 そうなんですか？
哲司 楽しい二割、モチたい八割。
美緒 ほとんどじゃないですか。
哲司 ほとんどだよ。いや、ちゃんと楽しいけど。
美緒 ああ、それならいいですけど。
哲司 大丈夫、モチでないから。
美緒 (笑って) じゃあいいです。
哲司 (笑って) うわ、ひど。
美緒 (笑う)

短い間。

哲司 劇って、こういうのがいいなっていう候補ないの？
美緒 ああ、一応、昔話とか誰でも知ってそうなのがいいかなって思ってるんですけど。
哲司 ああ、そうだね。
美緒 何かいいお話ないですか？

哲司 昔話？ 読まないからなあ、もう。
美緒 そうですよね。
哲司 昔話かあ……。
美緒 あ、全然、無理しないでいいんで。
哲司 ああ、いや、どんなのあったかなって思い出してた。
美緒 ああ。
哲司 え、童話だとちよつと子供っぽ過ぎる？
美緒 どんな？
哲司 グリム童話とか、インソップ物語とか。
美緒 ああ、外国の。
哲司 うん。
美緒 インソップ物語ってどんなのですたっけ？
哲司 すっぱいぶどうの話とか、北風と太陽とか。
美緒 ああ、北風と太陽。
哲司 覚えてる？
美緒 うーん、おぼろげに。
哲司 俺、昔けっこうよく聞いてたのよ。
美緒 覚えてる？
哲司 まだけっこう覚えてる。
美緒 あ、じゃあちよつとやってみてくださいよ。
哲司 え？
美緒 （人形を示して）これで。
哲司 （笑って）え、なんでそうなるの？
美緒 どんな話だったか、試しに。
哲司 （笑って）えー。さっきこういうの苦手だって言ったじゃん。
美緒 軽くていいんで。
哲司 さっきの根に持つてるでしょ。
美緒 ちよつと。
哲司 （笑って）許してよ。
美緒 （笑って）やってくれたら許してあげます。
哲司 （笑って）えー。そうだなあ。何がいいの？
美緒 インソップ物語。
哲司 の、どれ？
美緒 じゃあ、北風と太陽。
哲司 はい。
美緒 はい。

哲司 (左右の手に人形をはめて) まあ、エスコートしろって言われてますし。

美緒 (笑って) エスコートしてください。

哲司 はい、じゃあ。(背筋を伸ばす)

美緒 (哲司の方へ体を向け、小さく拍手)

哲司 (笑って) ちよっと、拍手は。緊張するから。

美緒 (笑って、拍手)

哲司 (笑って) もう。

美緒 (笑って) ごめんなさい。

哲司 ああ、緊張する。

美緒 (小さく笑う)

哲司 はい。じゃあ。

美緒 はい。

哲司 (笑う)

美緒 (笑う)

哲司 はい、やります。

美緒 はい。

哲司 北風と太陽。ある日、北風と太陽が力比べをしていました。北風が言いまして。(右手の人形を動かし)「僕は、どんなものでも吹き飛ばすことができるから、僕の方が強いに違いない」。すると、太陽も言いました。(左手の人形を動かし)「確かに、吹き飛ばす力はあるかもしれないけど、だから強いと言うのは、どうだろうね」。そこへ、一人の旅人が通りかかりました。北風は言いました。

「じゃあ、あの旅人の着ているコートを脱がせた方が勝ちにしよう」。太陽も「いいだろう」と言って、勝負がはじまりました。「じゃあ、まずは僕からだ」。そう言うとき北風は、旅人がかけて大きく息を吹きました。旅人は驚きました。

(太陽役の左手の人形を旅人役にして)「なんて強い風だ」。そう言うとき旅人は、コートを脱ぐどころか、すっかり襟を合わせてしまいます。北風はすっかりつかれてしまいました。(北風役の人形を太陽役にして)「次は僕の番だ」。太陽はそう言うとき、旅人をぼかばかあたたく照らしました。「なんてあたたくいんだ」。旅人はそう言うとき、あっさりコートを脱ぎ、それどころか、服を脱ぎ捨てて川に飛びこんでしまいました。おしまい。

美緒 (拍手)

哲司 どうでした?

美緒 すごいです、哲司君。すごい上手。

哲司 そう?

美緒 すごのおもしろかったです。

哲司 楽しんでもらえたみたいで。

哲司 ああ。じゃあ泊まり行く？

美緒 ああ、会いますけど、でも泊まるのは。

哲司 あ、そうなんだ。

美緒 うん、あんまり。

哲司 お父さん？

美緒 まあ。別に、泊まっても全然いいんですけど、たぶん。ひとりになっちゃうんで。

哲司 ああ。

美緒 まあ。

哲司 そうだよね。

美緒 ちよつと。

哲司 うん。

短い間。

哲司 じゃあ、妹さんが泊まりに来るとかは？

美緒 ああ、最近はそれもあんまり。

哲司 あ、そうなんだ。

美緒 小さい頃は、けっこう行き来してたんですけど、なんか、自然と。

哲司 ああ。

美緒 はい。

間。

美緒 あの。

哲司 はい。

美緒 哲司君、あんまり会ってないって言ったじゃないですか。

哲司 え、会ってるよ。

美緒 え、さっき、あっち女の子だからって。

哲司 ああ、いや、家行かないだけで、外で。喫茶店とか。

美緒 あ、ああ、なんだ。そっか。

哲司 うん。

美緒 そっか、ごめんなさい。

哲司 あ、いや、ごめん、言い方悪かった。

美緒 いえ、勘違いしちゃって。

哲司 いや。

美緒 なんだ、よかった。
哲司 何？
美緒 いえ、安心しました。
哲司 そうですか。
美緒 ごめんなさい。
哲司 いえいえ。

短い間。

哲司 うん、でも、そうなりそうな感じだから。
美緒 何が？
哲司 うん。会いづらくなるんだろうなっていう。
美緒 え、なんで？
哲司 いや、うん。
美緒 ……（腑に落ちないながらも）ああ。

短い間。

哲司 昨日、父親と会ったんだけど。
美緒 あ、昨日。
哲司 うん、昨日。一応、報告しまして。
美緒 ああ。
哲司 言った？ お母さんに。
美緒 あ、一応言いました。電話で。
哲司 どうだった？
美緒 ああ、まあ、別にそれはあんまり。
哲司 ああ、そうなんだ。
美緒 美緒はどう？ って感じで、母の気持ちは全然。
哲司 そっか。
美緒 はい。
哲司 まあ、俺の方は、なんか喜んでたよ。
美緒 あ、そうなんだ。
哲司 うん。よかったねーって感じで。
美緒 へえ。
哲司 ちよっと違うのかもね、男親と女親で。
美緒 そうなんですかね。

哲司 どうだろう。かもしれない。
美緒 うん。

短い間。

哲司 それで、昨日話したんだけど。

美緒 はい。

哲司 (笑って) ごめんね、話戻るけど。

美緒 ああ、いえ。

哲司 喫茶店で、まあ、一通り話して。

美緒 はい。

哲司 で、よかったなって、言っで。そうだねみたいな、話したんだけど。

美緒 うん。

哲司 そうしたら、なんか、じゃああまり会わない方がいいかなって話になって。

美緒 誰が？

哲司 父親が。

美緒 え、誰が？

哲司 父親。

美緒 え？

哲司 あの、父親が、俺とはあんまり会わない方がいいかなって。

美緒 え、なんで？

哲司 いや、なんか、よくわかんないけど。

美緒 ああ。

哲司 うん。

美緒 わかんないって言うのは、その、説明してもらえなかったっていう。

哲司 いや、説明って言うか、なんか、美緒ちゃんのお父さんに悪いかかって。

美緒 え、なんでですか？

哲司 いや、気つかうだろうからって、まあ、向こうも俺も。

美緒 ああ。

哲司 それで気まづくなったら、あれだからっていう。

美緒 はい。

哲司 いや、美緒ちゃんのお父さんが悪く思うっていうわけじゃないんだけど。

美緒 はい、それは。

哲司 ただなんか、気まづくなったら悪いなって、そういうことだと思っただけど、
なんか。

美緒 はい。

哲司 うん。
美緒 ああ。
哲司 まあ、だから。
美緒 はい。

短い間。

美緒 その、哲司君は、お父さんに会わないようにするって言われて。
哲司 はい。
美緒 何て言ったんですか？
哲司 ああ。(笑って) うん、まあ、そうだねって。
美緒 え？
哲司 いや、そうだねって、まあ、そんな感じの。
美緒 それって、もう会わないってことですか？
哲司 あー……。(笑って) だろう。そうなのかな。
美緒 いや、そうなんじゃないんですか？
哲司 (笑って) ちょっと、よくわかんなかったから、適当に答えちゃった。
美緒 いや、駄目ですよ。適当に答えちゃ駄目ですよ、それは。
哲司 うん、そうなんだけど。
美緒 だって、いいんですか？
哲司 (笑って) いいって言うか。
美緒 もう会えないってことですよね？
哲司 うん、いや、会わない方がいいかなってだけだから。
美緒 いや、会わないってことですよ。会えなくなるってことですよ、それは。
哲司 いや、どうなんだろう。
美緒 そうですよ、会わないってことですよ。会えなくなるって言われたんですよ、
哲司君。わかってますか？
哲司 うん、まあ……それはね。
美緒 (自分の言ったことに気づき) ああ……。
哲司 いいじゃない。
美緒 ああ。
哲司 うん。
美緒 すみません。
哲司 いや、それは全然。

間。

美緒 ああの。
哲司 はい。
美緒 父なんですけど。
哲司 はいはい。
美緒 たぶん、そんな悪い風に思わないと思います。
哲司 ああ、うん。
美緒 私が会いに行くのも、全然何も言いませんし。
哲司 うん。
美緒 なんで、全然いいと思います、会っても。
哲司 うん。
美緒 気まぜくなるとかは、ないと思うんで。
哲司 うん。
美緒 はい。
哲司 うん、わかった。ありがとう。
美緒 いえ。

短い間。

哲司 まあね。
美緒 はい。
哲司 でも、俺だけが言ってもしょうがないから。
美緒 ああ。
哲司 どう思ってるかわかんないし、実際。
美緒 うん。
哲司 口ではね、何とでも言えるから。
美緒 まあ。
哲司 わかんないから、本当のところは。
美緒 ……。
哲司 この間さ、家来た時にね。
美緒 はい。
哲司 キャッチボールしたって言ったでしょ。俺とお父さん。
美緒 はい。
哲司 すごい楽しそうだったのよ、お父さん。昔やってたんだって。いや、本当に
球速くて。俺全然取れなかったもん。
美緒 へえ。

哲司 野球なんか体育の時くらいしかやったことなかったから。自分ではうまく投げてるつもりなんだけど、全然違う方飛んでくし。ほら、風強かったから。春一番吹いてたから、あの日。

美緒 ああ。

哲司 でもお父さん、ドンマイドンマイって言いながら走ってボール取ってきて、剛腕だねとか、筋いいよとか褒めてくれるの。楽しそうにボール拾いに行つて、嬉しそうに投げてきて、もう本当に。

美緒 ……。

哲司 ありがたいよ、本当に。

間。

美緒 哲司君、癖って、さっき。

哲司 ん？

美緒 癖になつてると言つたじゃないですか。言わないのが。

哲司 ああ。

美緒 吐き出した方がいいって言つてたでしょ。

哲司 うん。

美緒 溜め込み癖ついてるって。

哲司 うん。

美緒 言いましたよね？

哲司 うん、言つたね。

美緒 うん。

哲司 うん、それで？

美緒 ……いえ。

哲司 (笑つて) うん。

美緒 ……。

間。

哲司 あの、まあ、いや。

美緒 はい。

哲司 いや、本当にね、恵まれてると思うのよ。お父さんいい人だし、母さん見る目あるなつて思うし。かわいい妹もできるし。

美緒 ……。

哲司 (笑つて) かわいいって、変な意味じゃないけど。

美緒 (小さく笑ってうなづく)

哲司 いっぺんにね、全部、一気に手に入っちゃうわけだから。

美緒 はい。

哲司 だからね、何か言うとかは。

美緒 ……。

哲司 ね。

美緒 うん。

間。

哲司、人形を眺める。

美緒、横目で哲司を見て、哲司の手の中の人形を指す。

哲司、気づき、人形を見て、美緒を見る。

何を伝えたいか察し、小さく笑う。

美緒、つられて笑う。

哲司、右手に人形をはめる。

美緒、うなづく。

哲司 (人形を動かし) 「なーんてね」

美緒 (笑う)

哲司 「本当はそんなこと思ってないよ。母さんハイでうざいし、美緒ちゃんのお

父さんは、こっちにちよっと媚び売ってきてる感じがちよっとうざいし、美緒ち

ゃんは、ちよっとかわいいし」

美緒 (笑う)

哲司 「本当はね、もうそれどころじゃないの。親のことなんか考えてる暇ないの。

だって俺高校生だし、バイトしないといけないし、勉強しないといけないし、部

活やらなきゃいけないし、恋もしないといけないし」

美緒 (笑ってうなづく)

哲司 「でも、勉強もついていけてないし、部員そんなに多くないのに、練習試合も

出してもらえないし、バスケ部なのに全然モテないし」

美緒 (小さく笑う)

哲司 「もうね、親のことなんか気にしてられないの。自分のことで精一杯なの。

なのに毎週土日予定入れられて、早く慣れてほしいんだろうけど、急かさないで

ほしいのよ。こっちにもペースがあるんだから」

美緒 (大きくうなづく)

哲司 「美緒ちゃんもうなずいてるし」

美緒 (笑って) 私はいいです、私は。

哲司 (笑って) 「まあね、そっちも色々考えてくれてるんだろうけどね。でも俺達付き合わされてるだけだから」

美緒 (うなづく)

哲司 「わかってるよ、二人ともがんばってるよ。俺達にすごく気つかってくれるよ。でもね、言わないけどね、週末は少し気が重いんだよ」

美緒 ……

哲司 「今週会わないといけないとか、来週はどこに行かないといけないとか、週末が近づくと、そんなことばかり考えてるんだよ。ここ一か月ずっと」

美緒 ……

哲司 「そんなとこ見せないよ。毎週楽しみなふりしてるよ。無理してるわけじゃないけど、無理してる時もあるよ。だって、正直に言っても意味ないし、言われたって困るだろうなってわかってるし、もうそうなっちゃってるんだから。俺はそういう感じになっちゃってるんだから」

美緒 ……

哲司 「だからさ、まあ、言わないけどね。言わないけど、なんかね」

美緒 うん。

哲司 何なんだろう。

美緒 ……

哲司 言いたかったのかもしれないけど、本当は何か言いたいこともあったのかもしれないけど、なんか、もうそんな感じできちゃったから。言いたいことは言わないようになっちゃったから。(笑って) どう言えばいいか、よくわかんないだよね。

美緒 うん。

哲司 うん。

美緒 ……聞いてますよ。

哲司 ああ…何だろう。苗字変わったら、友達にどう思われるのかなとかね。

美緒 ああ。

哲司 後は、何だろう。…学校に、卒業式とかね、美緒ちゃんのお父さん来て、俺どんな顔したらいいのかなとかね。後…子供は…うん、ちよっと、わかんないや。

美緒 うん。

哲司 (笑って) いや、もうね、正直…だって、二歳しか変わらないのに。

美緒 ……

哲司 ……どうしたらいいかなーって。

美緒 うん。

哲司 でもね、駄目でしょ。だって終わっちゃうかもしれないんだよ。

美緒 ……。

哲司 だから駄目なんだよ。駄目なんだよ。駄目なんだけど、なんか……。

美緒 うん。

哲司 だって、父さんは……そんなの考えたことなかった。

美緒 ……。

哲司 考えてなかったんだよ。

美緒 うん。

哲司 わかるんだよ、わかるんだけど。

美緒 うん。

哲司 なんか……何が悪かったんだろう。

美緒 ……。

哲司 ずっと考えてるんだよ、何がいけなかったんだろうって。無理させてたのかなとか、わがまま言ったかなとか、会うの負担だったのかなとか。俺何にもないし。勉強もバスケも全然だし。大会出たとか、いい点数取ったとか、何かあれば会ったり電話したりできるけど、何にもないから。母さんが、そもそもこうなつたのだって、俺が頼りないから、他の男に頼った（自分の言ったことに気づいて）……いい成績取れば、もっと安心させれるのかもしれないけど、なんかね……

（笑って）なんかね。

美緒 うん。

哲司 （笑って）最近、黒板よく見えないんだよね。

美緒 ……。

哲司 細かい数字とか、画数多い漢字なんかだともう、ぐちゃぐちゃってなって。

美緒 うん。

哲司 （笑って）もう全然読めないんだよ。もう全然読めないから……もう、どうしようかなって。

美緒 ……。

哲司 何だろうね。

美緒 ……。

哲司 あれかな、眼鏡新しくしたら、よくなるかな。

美緒 ……。

哲司 よくなるのかな。

美緒 ……うん。

哲司 ……。

美緒 哲司君。

哲司 ん？

美緒 いいよ。言っいいいよ。

哲司 ……。

美緒 言っていいよ。

哲司 ……うん。

美緒 うん。

哲司 ……うん。

美緒 ……もういいよ。

哲司 (遮って) 俺、本当は。あ。

哲司、鼻を押さえて、上を向く。

哲司 (人形を手から外し、美緒に返し) ごめん、ちょっと。

美緒 え、あ。

哲司、鼻を押さえて顔を上に向けながら、小走りに去る。

美緒、立ち上がるが、追いかけるようか迷う。

自分の座っていた椅子に鞆を置き、哲司の座っていた椅子に二つの人形を置く。

荷物を気にしながら、小走りに去る。

短い間。

美緒、駆け足で戻ってくる。

鞆から財布を取り出し、また走り去る。

間。

美緒、小走りで戻ってくる。

椅子の上の鞆をどけて座り、鞆は人形を置いた椅子に置く。

鞆の中身を確認し、財布をしまう。

二つの人形を手に取り、膝の上に抱えるようにして持つ。

落ち着かない。

間。

美緒、鞆から財布を取り出し、人形を二つ椅子に置き、早足で去る。

短い間。

美緒、手にひとつ缶を持ち、戻る。

鞆の中身を確認し、財布をしまう。

傍らに缶を置き、二つの人形を手に取り、椅子に座る。

間。

携帯電話を取り出し、かける。

美緒 ……もしもし。……うん。どう、そっち。……（声が大きくなり）そっちどう？ ……うん。……あ、ううん、こっちは全然。……今、トイレ。うん。……いいよ、全然。ゆっくりしてて。……うん。……あ、うん、はい。（幾分か緊張して）……もしもし。……（また声が大きくなり）もしもし。はい。……いえ、全然。色々話してくれてます。……あ、今、トイレに。はい。……いえ、あの、こっちは大丈夫なんで、ゆっくり……いえ。はい。……あ、はい。（緊張を解き）……うん。……大丈夫。うん。楽しいって。……うん、だから……うん。じゃあ、はい。

電話を切り、鞆にしまう。

間。

美緒、鞆から哲司にもらったレモンティーの缶を取り出し、開けて飲む。

間。

哲司、戻ってくる。

鼻に詰め物をしている。

美緒、鞆と缶をどける。

美緒 大丈夫ですか？

哲司 （座りながら）ああ、もう全然。大丈夫。

美緒 ああ。

哲司 ごめんね、急に。

美緒 いえ、それは全然。

哲司 （笑って）びっくりした。急に出てきたから。

美緒 （小さく笑う）

哲司 急にくるんだね。一瞬鼻水だと思った。

美緒 あったかいから、今日。

哲司 そうだよな。風冷たいから厚着したけど暑すぎた。

美緒 （空いていない缶を差し出し）あの、これ、首に。

哲司 （受け取りながら）あ、ごめん。首？

美緒 首冷やした方が、早く止まるんで。

哲司 あ、そうなんだ。どの辺？

美緒 あの、（自分の首の後ろを押さえて）この辺に。

哲司 （首の後ろに缶を当て）この辺？

美緒 はい、その辺。

哲司 （笑って）冷て。

美緒 ちょっと我慢しててください。

哲司 うん。

短い間。

美緒 お金使えてよかったです。

哲司 何？

美緒 (レモンティーを示し) これの。

哲司 ああ。(笑って) 払ってもらっちゃった。

美緒 (小さく笑う)

哲司 ちゃんとお礼します。

美緒 いいですってば。

哲司 うん。

美緒 いいですよ。

哲司 いや、もう、色々あれだから。

美緒 いや、別にそれは。

哲司 うん。

美緒 もう。

哲司 うん。

短い間。

哲司 え、どこで聞いたの？

美緒 え？

哲司 (首の後ろに当てた缶を示し) これ。俺知らなかった。

美緒 ああ、母が。

哲司 あ、そうなんだ。

美緒 小さい頃に、やってもらって。

哲司 へえ、知らなかった。俺チョップしてたもん、首の後ろ。

美緒 (笑う) 駄目なんですって、それ。

哲司 あ、そうなの？

美緒 余計出ますよ。

哲司 ああ、だから止まらなかったんだ。

美緒 (笑う)

哲司 (笑って) えー、チョップやめよう。

美緒 (笑って) はい。

哲司 うん。

間。
哲司、うつむいたまま、首に缶を当てている。
美緒、手の中の人形に視線を落とす。
二人、うつむいている。
美緒、缶を置き、人形を右手にはめて、哲司に見せる。
哲司、気づいて美緒を見る。

哲司 (笑う)

美緒 「こんにちは」

哲司 こんにちは。

美緒 「いい天気ですね」

哲司 そうですね。

美緒 「花粉がよく飛びますね」

哲司 (笑って) 俺言ったやつじゃん。

美緒 (笑う)

哲司 (もうひとつの人形を指し) そっち、貸して。

美緒、哲司に人形を渡す。

哲司、缶を一旦置き、人形を右手にはめて、また缶を首に当てる。
人形を美緒に見せる。

美緒、笑う。

哲司 「美緒ちゃん、最近どうですか？」

美緒 「普通です。哲司君はどうですか？」

哲司 「僕も普通です」

美緒 (笑う)

哲司 「何か、最近おもしろかったことはありませんか？」

美緒 「うーん……哲司君は、何かないですか？」

哲司 (笑って) 「ないから聞いてます」

美緒 (笑って) 「私もないです」

哲司 「ないですか」

美緒 「何にもないです」

哲司 「春休みの間に、遊びに行きたかったところはないですか？」

美緒 「うーん、特にないです」

哲司 「ないですか」

美緒 「哲司君は、遊びに行きたかったところはありますか？」

哲司 「北海道物産展以外」

美緒 (笑う)

哲司 (笑う)

美緒 「でも、どこ行っても人ごみで酔ってたと思います」

哲司 「出かけるのは嫌いですか？」

美緒 「少し苦手です」

哲司 「じゃあ、今日も嫌ですか？」

美緒 (笑って) 「ちよっと嫌です」

哲司 (笑う)

美緒 「本当は、家でのんびりするのが好きです」

哲司 「僕もです」

美緒 「家でのんびり過ごしたいです」

哲司 「僕もです」

美緒 「本当は、家で昼寝がしたいです」

哲司 (笑って) 「いいですね」

美緒 (笑って) 「本当は、お父さんとお母さんと、妹と私と四人で、のんびり過

ごしてみたいです」

哲司 (一瞬、言葉に詰まり) 「いいですね」

美緒 「いいでしょ」

哲司 「いいですね」

哲司、小さく笑う。

美緒もつられて笑う。

美緒 この間、母に電話したんです。

哲司 うん。

美緒 今から再現します。

哲司 え？ ああ、はいはい。

美緒 見ててください。

哲司 はいはい。

美緒 (ひとつの人形で二人分動かし) 「プルルル、プルルル、ガチャ。もし
もし」 「もしもし、美緒です」 「どうしたの？」

哲司 (はめていた人形を外して、美緒に差し出し) 使う？

美緒 (受け取り) あ、はい。(人形を左右の手にはめる) 「もしもし、美緒です」
「どうしたの？」 「別に何にもないけど、電話した」 「そう。元気？」 「うん、

元氣。紗江は？」「お友達と遊びに行ってるよ」「紗江の卒業式は、どうだった？」「よかったよ。ビデオ撮ったから、今度見せてあげるね」「うん、ありがとう。それでね、実は今度、お父さんが結婚することになったの」「ああ、そうなの。いつ？」「一年後。私が中学卒業したら」「そう。美緒はどう？ 嬉しい？」「うん、相手も優しく、いい人だよ」「そう。じゃあよかった」「お兄さんもできるんだよ」「あちらにもお兄さんがいるのね」「うん、二歳年上だよ」「そう。その子とは仲良くしてる？」「うん。すごく優しいし、ちよつとかわかしいよ」

哲司（小さく笑う）

美緒（笑う）「そう。お母さん安心した」「うん。お母さん、花粉症はどう？」

「出始めるよ。もうそろそろ家の中でもマスクしないといけなくなりそう」

「じゃあ、また眼鏡とマスクで顔見えなくなる前に、遊びに行つていい？」「時間が空いたら遊びにおいで」「泊まってもいい？」「いいよ」「何日泊まつていい？」「お母さん、お休みの日の方が時間あるから、土日がいいな」「そっか。あ、でも、土日はいつも予定があるの」

哲司 ……

美緒 「そう。困ったわね。平日だと、お母さん仕事があるから、あんまりゆつくりできないよ」「でも、私お母さんとたくさんお話したい」「困ったわね」「じゃあね、お母さん、だったら、私ずっと泊まってもいい？」

哲司 ……

美緒 「平日はお母さんの家に泊まって、土日だけ家に戻るの。学校もお母さんの家から通つて、もし遠くて難しいなら、転校してもいいよ。お金のことだったら、高校生になればバイトできるようになるから、それまで少し待つてほしい。実はね、私、福祉関係の資格が取れる学校に行こうと思ってるの」

哲司 ……

美緒 「今の部活も楽しいし、自分に合ってると思う。もし資格が取れば、お母さんにもお父さんにも迷惑かけなくてすむと思う。だから、それまでお母さんの家に泊まっていい？ 居候でもいいよ。何でもやるよ。料理も洗濯も掃除もするよ。そんなにうまくできないけど、でもがんばるよ。なるべく迷惑かけないようにするから、必ず恩返しするから。またお母さんの子供になりたいとか、そんなこと言わないから、だから、ずっと泊まってもいい？」

美緒、一瞬うつむきかけ、顔を上げる。

美緒 つていう。

哲司 うん。

美緒 感じの。
哲司 言ったの？
美緒 (笑って) 言ってないです。
哲司 そっか。
美緒 困るんで、言ったら。
哲司 ……。
美緒 困らせるだけなんで。
哲司 うん。

間。

美緒、じっと前を見ている。

哲司、首の後ろに缶を当て、じっと下を向いている。
雑踏に紛れる店内アナウンス。

哲司 あのね。
美緒 はい。
哲司 まあ、美緒ちゃんがよければっていう、あれなんだけど。
美緒 はい。
哲司 何かされたって言っていていいよ。
美緒 え？
哲司 二人でいる時に、何かされたとか言っていていいよ。
美緒 ……。
哲司 よければ。
美緒 哲司君どうするんですか。
哲司 うん、まあ…：受け入れるだけの甲斐性は、あるつもりでいます。
美緒 ……：そういうの、甲斐性って言わないですよ。
哲司 言わないかな。
美緒 言わないです。
哲司 (笑って) 言わないか。
美緒 (笑って) 言わないですよ。
哲司 うん。
美緒 (人形を動かして) 「言わないですよー」
美緒 うん。
哲司 ごめんね。
美緒 はい。

間。

哲司 首痛いね、これ。

美緒 (人形を手から外し、膝の上に置く) あ、もういいかな。

哲司 いや、いいんだけどね、前向きたくないし。

美緒 ああ。

哲司 (笑って) 鼻詰めてるの恥ずかしいし。

美緒 マスクしたら？

哲司 え？ ああ。

美緒 隠れるし。

哲司 賢い。

美緒 (笑う)

哲司、缶を傍らに置き、ポケットからマスクを取り出し、つける。
眼鏡が曇る。

美緒 あ。

哲司 ああ、そっか。

美緒 (笑う)

哲司 (笑って) そうだ、忘れてた。

美緒 (笑って) ごめんなさい。

哲司 うん、まあいいよ。鼻詰めてるの見られるより。

美緒 (笑う)

哲司 笑いすぎ。

美緒 (笑って) ごめんなさい。

哲司 (笑って) 美緒ちゃんって、けっこうひどいことするよね。

美緒 (笑って) ごめんなさい、ごめんなさい。

哲司 いや、いいけどさ。

美緒 (笑う)

哲司、美緒に眼鏡が曇るのを見せ、美緒が笑う。
二人、ひとしきりくり返す。

美緒 (笑って) いいです、もういいです。

哲司 いや、そっちが笑ってるんじゃない。

美緒 (笑って) ごめんなさい。
哲司 人の顔見て。
美緒 (落ち着けて) いや、ごめんなさい、大丈夫です。
哲司 本当？
美緒 大丈夫です。
哲司 (マスクの鼻の部分を調整しながら) 俺、こんなに笑われたの初めてかも。
美緒 ごめんなさい。
哲司 傷ついちゃう。
美緒 (笑う)
哲司 また。
美緒 いえ、大丈夫です。
哲司 (下手を見て) こんなに曇ってたら北海道物産展も読めないよ。
美緒 私読めますよ。
哲司 それは、マスクしてないんだもん。眼鏡かけてるし。
美緒 (小さく笑う)
哲司 美緒ちゃん、どれ食べたい？
美緒 (下手を見て) チラシの中で？
哲司 あの人達待たせすぎだから、買ってきてもらおうよ。
美緒 そんな、申し訳ない。
哲司 いや、遠慮しちゃ駄目だって。ほら、美緒ちゃんどれ食べたい？ 高いのでいいよ。
美緒 そうですね。
哲司 木彫りの熊でもいいよ。
美緒 (笑って) いらないます。
哲司 甘いもの？ ソフトクリームとか。
美緒 ああ、そうですね、ソフトクリーム……。 (笑う)
哲司 えー、まだ笑うの？
美緒 いえ、違います、違います。
哲司 何？
美緒 いや……。 (笑う)
哲司 (笑って) 何よ。
美緒 (笑いをこらえて) ちょっと、あんまり気にしたことなかったんで、あれだったんですけど、私……。 (こらえきれずに笑う)
哲司 (笑って) 何？
美緒 (笑って) 私、北海道嫌いかも。

哲司、思わず笑う。
美緒、つられて笑う。
二人、笑いながら。

哲司 え、今気づいたの？

美緒 今。今気づいた。

哲司 だって行ったことあるんでしょ？

美緒 行きました。

哲司 え、楽しくなかったの？

美緒 いや、って言うか、お父さんいました。

哲司 いたの！

美緒 いた。思い出した。

哲司 マジで。

美緒 忘れてた。

哲司 お父さんかわいそう。

美緒 あの、妹がずっと泣いてて、お母さんに放っておかれて、私がむすつとして
たから、お父さんがソフトクリーム、お父さん買ったの？

哲司 ソフトクリーム、お父さんだったの？

美緒 お父さんだった。忘れてた。

哲司 うわ、かわいそう。

美緒 ごめん、お父さん。

哲司 しかも嫌いって。

美緒 (笑って話せない)

哲司 えー、じゃあ新婚旅行どうする？

美緒 えー、どうしよう。

哲司 行かない？

美緒 いや、うん。

哲司 行きたくないもんね。

美緒 行きたくない。

哲司 じゃあ阻止する？

美緒 阻止って。

哲司 何としてでも北海道には行かせない。

美緒 え、どうやって？

哲司 北海道行くなら、再婚させないって脅す。

美緒 いいですね。

哲司 え、いいの？

美緒 いいじゃないですか、阻止しましょう。絶対北海道の地は踏ませない。
哲司 せっかく今日下見来たのに。
美緒 もうしょうがないです。
哲司 うん、しょうがないよね。嫌いなんでもんね。
美緒 大っ嫌い。
哲司 じゃあ、しょうがない。
美緒 しょうがない。
哲司 断固阻止。
美緒 北海道、断固阻止。
哲司 ひどいよ。
美緒 ごめんなさい。

二人、笑い続ける。
目を拭う。
間。

しばらくして、笑いが収まる。
美緒、それでも目をこすっている。

美緒 かゆくなってきた。
哲司 かいちや駄目だよ。
美緒 だってかゆいんですもん。
哲司 ほら、マスクしなさい。
美緒 (笑って) 曇る。
哲司 (笑って) 文句言わない。

美緒、鞆からマスクを取り出し、つける。
やはり眼鏡が曇り、笑う。

哲司 笑わないの。
美緒 (笑って) だって。
哲司 症状出てるじゃん。
美緒 花粉が、もうだいぶ体に溜まっちゃってるんですよ。
哲司 溜まっちゃってるのか。
美緒 あふれちゃってるんですよ。
哲司 花粉が。
美緒 花粉が。

哲司 どぼーって。

美緒 (笑う)

哲司 もう、体の中から。

美緒 マスクしなきゃ。

哲司 マスクしなきゃ。

美緒 甜茶飲まなきゃ。

哲司 飲まなきゃ。

二人、笑う。

哲司 曇るね。

美緒 うん。

二人、笑いながら眼鏡を曇らせる。

終わり